独自価値提供と新分野挑戦

レアックス 会長兼社長 成田昌幸氏

持続可能な社会資本整備へ

地質調査を手掛けるレアックス（本社・札幌）は、ボアホールカメラ開発も柱とし、社会に独自の価値を提供してきた。2028年に創立40周年を迎える企業として成熟しつつある半面、社内でハンター養成に乗り出すなど新分野への挑戦を絶やさない。その背景にある思いを、成田昌幸会長兼社長は「社会資本整備を持続可能なものにしなければ」と語る。

（経済産業部　阿部みほ）

親和性の高い分野へ挑戦

地質調査業とメーカーという2つの顔を持つ。近年は人工知能（AI）を活用した地質調査技術の開発に取り組むほか、今春から社員の猟銃免許取得に乗り出した。熟練技術者の目に代わるAI、自然環境を熟知する必要があるハンターに地質調査との相関を見いだし、「親和性が高いところを組み合わせる」と話す。

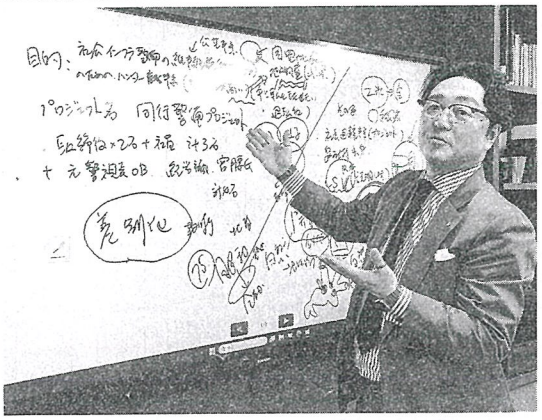
そこには「中小企業は大きな投資ができず、失敗するわけにもいかない」との危機管理がある。人口減少、ヒグマ被害増加といった社会問題に対し、自らの事業分野と潜在的な適合性のある手段で早期に手を打つ。

「土や水をお金にする地質調査はものすごく遠い話だが、地質データがないと設計・施工ができない。この仕事は徳の高い事業」と自負。「当社が投げた石は小さいかもしれないが、どういう切り口を使ったとしても、社会資本整備を維持可能な状態にしなければ」と展望した。

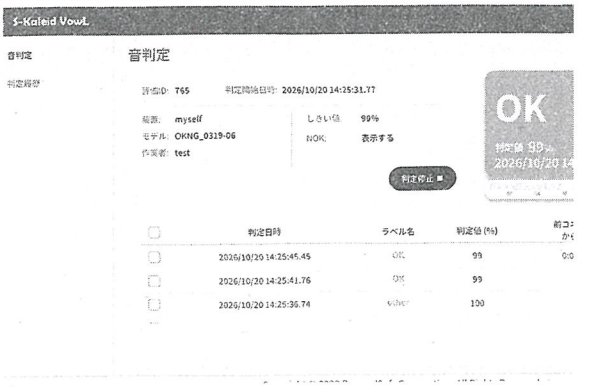
新事業参入で自らの本質深化

人口が減少へ転じるなど社会が新たな局面に突入する中、本道のさらなる発展には「開発の延長では難しい」と唱える。過去の積み重ねとは異なった次元で、これからの成長を図る必要性があると提起する。

さまざまな社会課題が連鎖する中、「十把ひとからげに大きいテーマを議論している。切り口を一つ一つ、つぶしていかないと物事は進まない」と指摘。社会資本整備は「国民の命を守り、豊かにするのが目的」と強調する。そこには、自社の社員が職能を習得し生きがいを持って働いてほしいとの願いも込める。新事業への参入によって、自らの本質を深化させる。



自社の本質や社会課題解決の在り方を語る成田氏



「エスカレイドボウル

音はいつ発生するか分からず、小さくて短い嵌合音は聞き取りづらい。瓜生社長は「これまで熟練工の耳が聞き分けていた音。私自身、音がいつ鳴ったかすら分からず大変だった」と振り返る。

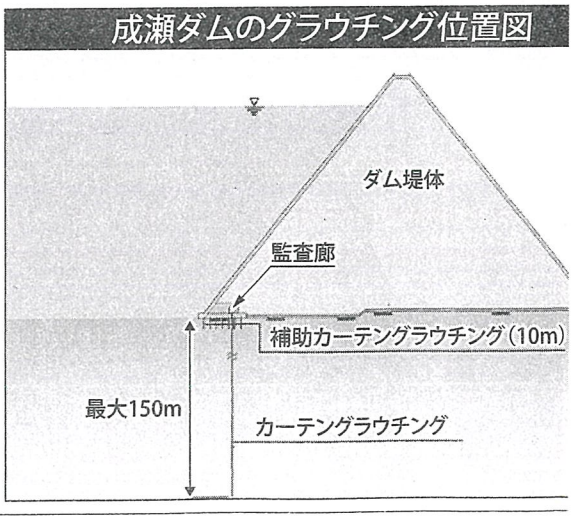
このため、エスカレイドボウルの開発は想像以上に難航。開発チームの4人が試行錯誤を繰り返しながら2年がかりで完成させ、24年に発売にこぎ着けた。

不良品が発する音のサ

ダム基礎処
24時間連続
施工量向上、人

鹿島が開発

鹿島は、ダム基礎処理工の24時間連続施工を可能とする自動化技術を開発した。自動ボーリングマシンと自動グラウンチ



入管理、プラントや配管の洗浄までを実施。管理室、原液希釈装置を備えた自動注入プラント、パッカー装置で構成する。

自動化技術の導入により、2交替制勤務の休憩・交代時間中も無人で作業を継続でき、24時間連続施工を実現。複数箇所の同時施工も可能だ。

実工事で、中断することなく1ステージを施工できることを実証。グラウンチング作業では、延

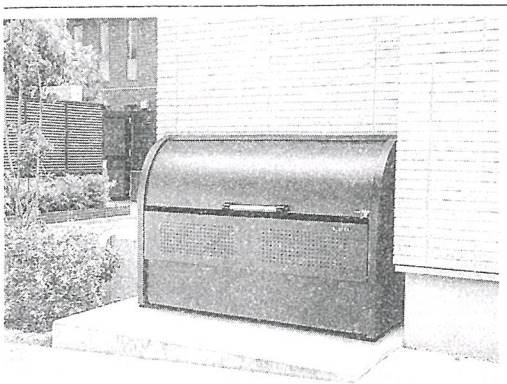
スリムサイズのごみ収集庫発売

ダイケン、集合住宅などに

ダイケンは、扉の開閉音が静かなごみ収集庫「クリーンストッカーCKR－G－2型」のスリムサイズを発売した。集合住宅などの限られたスペースに設置できる。

奥行き600㍉のスリム設計。上部の扉は回転式で、本体内部に扉が納まる。前扉の前面にスペースがなくても開閉できる「上限スラ

限られたスペースに設置できる



サンワサプライ

サンワサプライは、ポータブル拡声器「400－SP132」を発売した＝写真。拡張器とワイヤレスマイクは持ち運びやすい充電式で、屋外イベントや広い会議室での発表に提案している。

ワイヤレスマイクは、マグネットでシャツの襟元やポケットに固定できる。雑音が多い環境では、付属する有線タイプのヘ